Urban Design Smart City School
Project Report

Matsuyama

2022. 8–2022. 11

アーバンデザイン・
スマートシティスクール松山
プロジェクトレポート
2022.8-2022.11







Contents　もくじ

Introduction
05　UDCM センター長メッセージ
07　「アーバンデザイン・スマートシティスクール松山」とは

Schedule
08　実施スケジュール

Recture
09　01 八戸市美術館
11　02 地域デザインの実践と理論
13　03 松山のミュージアムを識る
15　04 スマートシティ

Project
17　01 歴史班
25　02 地域デザイン班
35　03 モビリティ班

Epilogue
45　レクチャー講師メッセージ
47　受賞のご報告
49　活動風景

UDCM センター長メッセージ



UDCM センター長 / 東京大学 教授

羽藤 英二　Eiji Hato

『地域デザインミュージアムをつくる』というテーマでアーバンデザイン・スマートシティスクールをやってみようと思ったのは、福島県の浪江や岐阜県の中津川付知の活動がきっかけです。浪江と付知で地域デザインセンターの運営にここ数年取り組んでいますが、原発災害からの復興に今なお取り組んでいる浪江の近世の火災復興で町だてされた新町通りや、リニアの開通を控えた付知の豊かな用水路と明治期に建てられた上見屋さんはそこにしかない地域資源と言っていいと感じています。では松山にはどんな地域資源があり、地域資源を生かしてどんな新しい愉しみ方が考えられるだろうか。地域にはそれぞれかけがえのない地域資源が存在するのだけれどもその資源は資源のままでは価値を発揮できない。誰かが掘り起こし磨いてこそ光を放つ、そのための努力を惜しんで今に甘んじていては未来に向けたまちづくりの可能性を閉ざしてしまうのではないかと私たちは考えました。古くからの風景を今に残す三津浜や道後これから変わるであろう JR 松山駅さまざまな地域を歩いてあるいは新たなモビリティでむすぶ社会実験とその効果分析を私たちは構想し実現しました。銘店と言われる店にはそれぞれなりの物語があり、一見見向きもされなくなったような川にも歴史がある。私たちの試みは地域をつなぐ新しい暮らしのスタイルへとつなげるための都市設計の新たな方法論の提案といってもいいでしょう。私たちの今後の活動にぜひご期待ください。



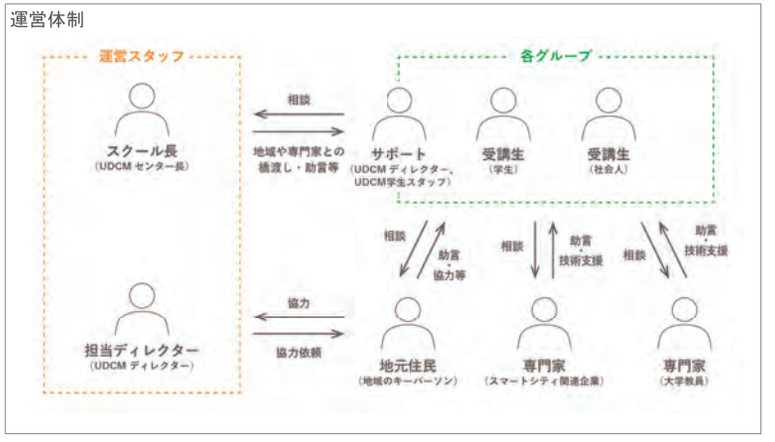
「アーバンデザイン・スマートシティスクール松山」とは

「アーバンデザイン・スマートシティスクール松山」は、地域資源を生かし、新たな公共空間の構想と計画を実践する市民参加型学習プログラムです。受講生はグループに分かれ、それぞれが対象とする敷地の歴史的成り立ちを踏まえた実践的なまちづくり活動を学ぶ場としています。2022 年度は『地域デザインミュージアムをつくる』をテーマに受講生を募集し、18 名の受講生が 3 グループに分かれ、オンラインとオフラインを織り交ぜたレクチャーと並行して、グループワークを実施。具体的には、地域形成史や地域デザインを踏まえた展示や企画の実践に向けて、グループごとに文献調査やインタビュー調査などに取り組みました。

各グループには UDCM ディレクターと UDCM 学生スタッフ（スクール TA）をサポートメンバーとして配置し、グループの受講生たちに助言や技術支援をおこないながら、活動に伴走する役割を担いました。また運営スタッフは、各グループに対して、適宜、協力者（地域のキーパーソンや大学教員などの専門家）との橋渡しやグループワークの進め方などの助言や補助をおこないました。

スクール活動まとめページ▶

運営体制



Schedule

8/23 ● 準備会・ガイダンス



【9/1 全体トークの集合写真】

レクチャー１「八戸市美術館」

講師：浅子 佳英　PRINT&BUILD
西澤 徹夫　西澤徹夫建設事務所 主宰
森　純平　東京藝術大学 助教
一般社団法人 PAIR 代表理事

8/26 ● レクチャー１

9/1 ● 全体トーク

レクチャー２「地域デザインの実践と理論」

講師：青柳 菜摘　美術作家
伊藤 香織　東京理科大学 教授
UDCM プロジェクトデレクター
川口 真沙美　日本デザイン振興会
増橋 佳菜　東京大学大学院 修士１年

9/3 ● レクチャー２
レクチャー３



【9/3 レクチャー3の様子】

レクチャー３「松山のミュージアムを識る」

講師：平岡 瑛二　子規記念博物館 学芸員
徳永 佳世　坂の上の雲ミュージアム 学芸員
中野 靖子　伊丹十三記念館 学芸員

9/4 ● グループワーク



【9/4 グループワークの様子】

9/8 ● レクチャー４＋グループワーク

レクチャー４「スマートシティ」

講師：大村 珠太郎　清水建設
谷口 暢夫　NEC

9/11 ● 全体トーク
＋グループワーク



【9/4 グループワークの集合写真】



【9/11 全体トークの集合写真】

9/30 ● 全体トーク＋グループワーク

展示・企画準備期間



【9/11 全体トークの様子】

10/14 ～ 23 ● 展示・企画実施
（urban design week. 内プログラムとして開催）

11/20 ● 活動レポート提出

01 八戸市美術館

講師：

浅子 佳英　PRINT&BUILD
UDCM プロジェクトディレクター

西澤 徹夫　西澤徹夫建設事務所 主宰

森　純平　東京藝術大学 助教
一般社団法人 PAIR 代表理事



【8/26 レクチャー1の集合写真】

8/26、「八戸市美術館」のことをメインテーマに、浅子佳英氏、西澤徹夫氏、森純平氏によるレクチャーがおこなわれました。

まず、浅子氏による八戸市美術館の展示品の詳細と展覧会の構想・意図についてのお話がありました。八戸市に暮らしている方々が持ち寄った毛布を使用した作品など、個性的で独創的な作品が多く、実際の使用品を活用した作品などが印象に残りました。絵が単に美術館の中にあるだけではなく、展覧会全体を通してみると八戸市の文化、まちと美術・作家・絵画の関わりが見えてくるとのご説明をいただきました。地域デザインの素材の掘り起こしについては、無難な所から興味・関心を抱き、数珠つなぎ的に興味・関心を広げて、本来、美術館との関連性が無いものから視野を広げて繋げていくような視点が重要であるといったお話をいただきました。
西澤氏からはスケール感が丁度良く、まとまりがあるために広がっていくようなマインドマップのような情報が必要であるとの意見をいただきました。

続いて、アーカイブしていくための空間、展示するための空間、活動していくための空間のデザインについて、羽藤英二 UDCM センター長との討議が行われました。

羽藤氏によるアーカイブの価値についての持論の後、ゲスト講師 3 名それぞれの考えについて伺いました。

西澤氏は、蓄積や痕跡がこびりついているなど、空間や場所に活動が残っていくような雰囲気や仕組みを作ることが記憶や記録に結び付くアーカイブになると語られました。森氏は、何を残すのか決断すること、変わらないために変え続けないといけないことがアーカイブの問題としてあると語られました。浅子氏は、現実空間の重要さを紐解き、そこから現実空間をネット空間の討論がされました。

その中で西澤氏が述べた「現実世界がネット世界を追従する場所になってきている」という言葉が印象に残りました。

また、松山の魅力をアーカイブ・発信することに関する議論が行われ、その中で、自分の好きな風景や子どもの頃に習った独自の文化を持ち寄って話すと面白くなるのではないかというお話が出ました。受講生からは、松山のまちのイメージについて伺いたいという質問がありました。

西澤氏は綺麗な曲線を描いている路面電車、浅子氏は石手寺が良いとの意見を述べられました。三者三様の意見をかき集め、話し合うことそのものが地域デザインであるという話で盛り上がりました。

ゲスト講師 3 名の熱意が伝わり、実りあるレクチャーでした。今後、スクール活動を行っていく中で専門家の意見は非常に参考になります。さまざまな考え方を知ったうえで、自分自身が取り組みたいことを見つけ、実践できるように一緒に準備を進めていきましょう！（TA 松尾）

02 地域デザインの実践と理論

講師：

青柳 菜摘　美術作家

伊藤 香織　東京理科大学 教授
UDCM プロジェクトディレクター

川口 真沙美　日本デザイン振興会

増橋 佳菜　東京大学大学院修士 1 年



【9/3 レクチャー2の様子】

9/3 午前は、「地域デザインの実践と理論」をメインテーマに、４名の講師の方々をお招きし、ご講演いただきました。

はじめに、青柳菜摘氏から、作品のコンセプトや道後クリエイティブステイ時の活動内容についてご紹介いただきました。その中で、作品を制作する際に「目に見えないものをどう記録するか」を考えて作品を制作しているというお話があり、気軽に撮影ができる時代であるがゆえに、自分が見ている景色を一枚の写真や動画にすべて捉えられると勘違いしがちであるというお話が印象に残りました。また、こうした考えの下、時間の経過や見慣れてしまったものなど、今まで見えなかったことに気付くことができるか、見つけた際にどう探しに行けるかを作品制作の際に考えているという、作品への思いをご説明いただきました。

道後のクリエイティブステイでは、「ネットで配信して積み重なるものと実際に自分で書いたものというオンラインとオフラインのものを積み重ねていくということをしてきた」とご説明していただき、個人の記録でも配信をすることで場所として社会で共有される面白さについてのお話も印象に残りました。

つぎに、伊藤香織氏からは、グッドデザイン賞受賞作品にみる「地域デザイン」について、そして地域芸術祭についてご紹介いただきました。グッドデザイン賞については、2020 年と 2021 年に選出された空間や地域で行われている取り組みのデザインを例に、様々な立場や地域の特性を生かした「地域デザイン」についてお話しいただきました。その中で、内向的になりやすい地域デザインを地域外の人の視点を入れることで、捉え方に変化がうまれるというお話が印象に残りました。また、地域芸術祭の事例を踏まえて、定義付けの難しい地域アートが持つ地域の魅力を発信する可能性の高さについても、お話しいただきました。

つづいて、川口真沙美氏からは、何がデザインミュージアムに必要かについて、ご自身の考えをお話しいただきました。デザインには、地域資源や歴史文化を共有することによって地域らしさの共通理解をする“アーカイブ”と、見出した地域らしさを継承していく“プロモーション”の２つに分けることができるとご説明いただきました。また、グッドデザイン賞が担う役割や仕組み・理念やデザインの領域の広さについてもご説明をいただき、その中で、審査の視点ではその時代で良いとされているものをもとに評価していること、それらを時系列に並べて日本のデザインとして共有することで生活文化との関係性なども併せて考えることができるというお話が印象に残りました。

デザインプロモーションの変化によりデザイナーではない人のデザインに対するかかわり方や自分の興味関心のある分野をキャッチする仕組みなど、デザインを通して身の回りの社会の課題について考えることができるとお話いただきました。

さいごに、増橋佳菜氏から、2022 年 3 月に実施したミュージアムツアー「江東区防災ミュージアム」についてご紹介いただきました。このツアーは、異なるコンセプトを持った 3 つのミュージアムをツアーとして回ること自体が模擬避難体験になっており、各ミュージアムの展示では、過去の被害から実際の被害想定などを視覚だけでなく、体感してもらうことで防災について考えていただくきっかけになっている点と、抽象的な表現をすることで、来客者のイメージがわきやすいと考えたという点が、印象に残りました。

今回のレクチャーでは、「地域デザイン」の可能性の広さや、空間と時間をとらえた表現方法などを学ぶことができ、地域デザインミュージアムへの期待が膨らむ大変貴重な機会となりました。また、自由度が高いため、迷うこともあるかもしれませんが、自分たちでキーワードをつなげていくことなどを意識して活動を進め、このスクールを通して、実践のプロセスや達成感などを、受講生の皆さんと一緒に感じていきたいなと思います。（TA 谷）

03 松山のミュージアムを識る

9/3 午後は、「松山のミュージアムを識る」をメインテーマに、松山を代表するミュージアムである子規記念博物館、坂の上の雲ミュージアム、伊丹十三記念館から３名の学芸員の方々をお招きし、ご講義いただきました。

はじめに、平岡瑛二氏から、博物館のコンセプトや展示、俳句大会などの博物館主催の活動についてご説明をいただきました。その中で、「正岡子規という一人の人間を見ると、俳人や歌人、明治時代を生きた青年などさまざまな側面がある。子規の生涯を通じて、松山の伝統や文化、近代文学、近代史といったことを広く見てもらおうという展示をしている。」というお話が印象に残りました。

つづいて、徳永佳世氏から、坂の上の雲ミュージアムが持つ３つの機能（小説「坂の上の雲」などに関する展示機能・フィールドミュージアムのガイダンス機能・まちづくりの支援機能）や展示デザインについてお話しいただきました。展示デザインについては、視覚的、聴覚的に人々に見せていくことを通して、小説について改めて思索を深められるような展示空間の構成をおこなっているとし、イラストを用いた展示デザインや模型や音声を使った場面の立体再現、空間演出など実例写真をふまえながらご紹介いただきました。

つづいて、中野靖子氏から、記念館のコンセプトや学芸員の日常業務、企画展の構想についてお話しいただきました。まず、記念館の概要と設立経緯について、映画監督である伊丹十三の生い立ちや松山との関わりをふまえながら、ご説明いただきました。また、記念館の設計デザインについて、外観・内観の写真や平面図を用いながらご紹介いただきました。さらに、館内の展示構成について、伊丹十三の少年時代から映画監督になるまでの仕事や趣味について、年代を辿るように展示されているとした上で、多様な展示デザインが施された館内写真をふまえながらお話しいただきました。そして、企画展の構想については、開館からおこなわれてきた６つの企画展を遡りながら、その概要や背景などをご説明いただきました。お話の中で、「誰にでも覚えがあること、みんながやっていること、みんながもやもやと疑問に感じていることを切り口にすると、お客様にも興味を持っていただけて、伊丹十三を（映画監督としてだけではなく、）また違った側面から見ていただけるのではないかと思う」という言葉が印象に残りました。

講義後は、羽藤英二 UDCM センター長と３名の学芸員の方々によるクロストークがおこなわれました。まず、羽藤氏から、講義の感想として、各ミュージアムがもつデザインの個性についてお話しいただきました。それぞれに展示されている年表から見られる時代、時間の表現の仕方など細やかに施されるデザインの工夫に触れながら、「展示を見ている者の人生と展示されている者の人生が近づいていくような感覚が『展示』から生まれる」と述べられました。また、正岡子規、司馬遼太郎、伊丹十三という３人の創作者と松山との接点について触れながら、「松山というまちが変わっていく中で、彼らがどのような創作活動を行なっていたのかを知ることや、人々が生きた時代を表している都市という器を表現することで、彼らが生きた時間をもう少しだけ近くに感じるきっかけになるのではないか」とお話しいただきました。

講師：

平岡 瑛二　子規記念博物館 学芸員

徳永 佳世　坂の上の雲ミュージアム 学芸員

中野 靖子　伊丹十三記念館 学芸員

さらに、羽藤氏は、ミュージアムは展示機能だけではなく、文化的な場所としての機能もあるとした上で３名の学芸員の方々に対し、『学芸員として感じる課題や苦労』という話題提供がなされました。平岡氏からは、年代の古い資料は文字資料が多いので、単にパネル化するだけではなく、映像やイラストなどを用いた工夫が必要な点を挙げられました。また、中野氏からは、伊丹十三記念館が郊外に位置し、観光向きでない点を挙げ、来館者数を伸ばすための課題について述べられました。そして、徳永氏からは、若い世代に関心を持ってもらうための展示のあり方について取り上げ、さまざまな仕掛けを作って、展示の中に入っていきやすくする工夫が必要と述べられました。羽藤氏からは、ミュージアムの外を出たときに、当時の時代が感じられたり、当時の情景に共感できるようになるといいとした上で、受講生にも、時代を超えて、共感を生み出す仕掛けをいろいろな表現の仕方で挑戦してもらいたいとしました。



【9/3 レクチャー3の様子】

質疑応答の時間では、受講生から「ミュージアムは一回行ってしまうと、その後行かなくなってしまうことが多いが、何回も見るからこそ味わえる、考えるというようなことがあれば教えてほしい」という質問が上がりました。これに対し、中野氏からは、「毎日の生活の中でも、目がいくところが違うと思う。変わらないものを見て、自分の変化を感じることに楽しさを覚えたり、お客様の見方から新たな発見を感じ取ることが楽しい」とお話しいただきました。最後に、羽藤氏は、「今、ミュージアムが地域資源を価値化させるものとして重要なインフラストラクチャーだと認識されるようになってきている。地域の人に新しい気づきを与えられるような、地域デザインミュージアムをつくっていけたらと思う」と述べられ、今後のスクール活動に大きな期待を寄せました。

今回は、展示のデザインや表現を学ぶだけではなく、学芸員の皆さまの展示に懸ける想いに触れられる大変貴重なレクチャーとなりました。各班の活動に大きな推進力を与えてくださったように思います。今度の週末は、展示の勉強と息抜きを兼ねて、ミュージアムを訪れてみるのも良いかもしれません！私もミュージアムでのんびり休日を過ごしたくなりました。（TA 中出）

04 スマートシティ

講師：

大村 珠太郎 清水建設
谷口 暢夫　NEC

9/8 は、「スマートシティ」をメインテーマに、大村珠太郎氏と谷口暢夫氏をゲスト講師にお招きし、ご講義いただきました。

はじめに、UDCM 三谷卓摩ディレクターから、松山アーバンデザインセンターが参画している「松山スマートシティプロジェクト」について説明がありました。国土交通省のスマートシティモデルプロジェクトとして支援を受けており、都市データを活用した「データ駆動型都市プランニング」を確立することで、松山市が取り組む「笑顔あふれる歩いて暮らせるまち」の実現を目指しているとのお話がありました。人流や車両、建物、道路などの情報をサイバー空間に取り込んだシミュレーションを行っており、公・民・学の協働の基にスマートシティ構想がなされている点が印象的でした。さらに、時刻表や交通結節点などのデータを活用したシミュレーションによって、アクティビティとモビリティの検証・評価が行われ、将来の予測が可能になるとの説明がありました。

つづいて、大村珠太郎氏（清水建設）から、「デュアルモード・ソサイエティにおける交通防災まちづくり」として、豊洲スマートシティの先進的な取り組みについてご紹介いただきました。



【9/8 レクチャー4の集合写真】

まず、清水建設は「次世代のまちを共創する」ことを目指し、豊洲スマートシティの開発に取り組んでいるとご説明いただき、歴史や対象エリア、推進体制の詳細と「ミチノテラス豊洲」におけるプロジェクトの概要とそれが果たす機能についてお話いただきました。道の駅が果たす機能は休憩所や地域活性化が挙げられますが、それに加え、複数のモビリティが混在する交通結節点の場、安心・安全の防災機能の実現を図った整備と施設の運用方法のお話が印象に残りました。また、建物 OS を介してさまざまなデバイスが繋がるような建物づくりを目指す「DX-Core」を開発したり、都市 OS を用いて 3D 化したシミュレーションを行ったりすることで、まちにとって最適なサービスを提供しているとのご説明をいただきました。豊洲のまちづくりのためには、豊洲スマートシティ推進協議会の取り組みによるポータルサイトやスポットラリー、「ミチノテラス豊洲まちびらき」によるマルシェの運営等によって地域の連携を維持し、今後のまちづくりに必要となるデータを社会実証によって分析することが重要であると述べられました。

つぎに、谷口暢夫氏 (NEC) から、「まちづくりと DX」として、松山をはじめとする現場でのデータ取得・収集の実践についてご講義いただきました。少子高齢化や COVID-19 などの社会的側面から、まちづくりは段階的にブランド価値が増加しているとのご説明のあと、課題の多様化によって合意形成が難しく、まちづくりに終わりがない現状についてお話いただきました。そこには、サプライチェーンの変遷の中で、IT 効率化による新しいデータの価値創出として、リアルな人とモノへのデータのフィードバックとその背景にある技術的進展についてご説明をいただきました。技術の具体的な活用については、新横浜花火大会で実証実験がされており、カメラと Wi-Fi センシングの同時計測を利用したゾーニングによって、3 つの駅の混雑、人流、滞在時間を計測・推計した例が印象的でした。そのほか、松山市駅前広場等でも実証実験が行われており、複数のデータを組み合わせることによって高精度なデータを生み出すことの可能性についてご説明いただきました。これらの実証実験を通して、そもそもデータ流通の推進以前にデータが乏しい現状が浮かびあがり、加えて現実を踏まえないトップダウン型のアプローチや戦略としてのメトリック（計測指標）やビジョンの欠如等の課題についてもお話いただきました。これらの課題を踏まえ、未来を考えるうえでのボトムアップやビジョンと戦略の策定、人材面の改善を通して、楽しむことで未来を考える必要性について述べられました。

今回のレクチャーでは、松山の取り組みだけでなく、他地域の先進的な取り組みの事例を知る貴重な時間となりました。今後、各班が本腰を入れて活動に取り組んでいくことになります。心配事やわからないことが増えていくと思いますが、みんなで支え合ってより良い活動にしていきましょう！（TA 松尾）

01 歴史班

受講生　柳田恵利（松山大学 3 年）
的場風香（愛媛大学 2 年）
山下日菜子（愛媛県庁）
井上優花（松山市役所）

サポート　渡邉浩司（UDCM ディレクター）
中出舞（UDCM 学生スタッフ）



ー企画名

Memory Museum ～未来へ紡ぐ三津浜の記憶～

ー実施日時

10 月 15 日 (土)、16 日（日）
22 日（土）、23 日（日）
10 時～ 17 時

ー実施場所

〒 791-8062
愛媛県松山市住吉 1 丁目 3-37　空き店舗

ー参加者数

延べ 229 人

ー効果検証方法

来場者が展示から三津浜の記憶を蘇らせ、未来へと紡ぐことができるかについて検証する。スクール生が、来場者から聞いた展示に関する記憶や情報を付箋に書き、対象の展示付近に貼り付ける。また、年表にホワイトボードを設置し、蘇った記憶を書いてもらうことで検証した。

企画内容

3 つの企画を軸に、三津浜の歴史に関する展示を行った。
・古写真で蘇る生きている年表　・インタビューで蘇るあの頃の三津浜　・8mm フィルム映像で蘇る昭和 38 年

ー企画の背景と目的

三津浜の町の発展は、港と朝市から始まり、明治時代には鉄道を開通するなど大いににぎわっていた。1980 年代からは海上旅客輸送の需要低下、それに伴う来街者の減少、さらに地区住民の減少・高齢化が同時に進展し、三津の商業地は急速に勢いを失った。そのような三津浜を盛り上げようと平成初期からまちづくり活動が行われていた。



【三津浜の歴史の年表パネル】

今回の企画は、形成史的な「歴史」だけではなく「記憶」をアーカイブするような展示を行い、地域の方々が昔の記憶をたどり、話し合うことができる場をスクール生がアイデアを出しながら工夫して創った。また、展示を見た後、実際に町を歩き、自身で歴史に触れる体験することを意図した展示とした。華やかでにぎわいのあった近代から現代における三津浜の歴史を伝えることで、地元の方や観光客に三津浜の魅力を知ってもらうことを目的とした。



【三津浜の町並み】

活動内容

10 月 15 日 (土)、16 日 （ 日 ）、22 日（土）、23 日（日）の 4 日間、三津浜の約１５０年の歴史について年表（縦 1.8m × 横 4.0m）としてまとめ、古写真、解説文などと合わせて展示した。また、地域の方７名にご協力いただき、三津浜での記憶をインタビュー、撮影した映像と昭和 33 年に撮影した貴重な８mmフィルム映像をお借りして編集し、ドキュメンタリー映像として上映した。さらに、三津浜の都市形成の移り変わりを学べる時代ごとの古地図や昭和 53 年に三津浜で撮影された活気に満ち、人情溢れる古写真、賑わいをもう一度取り戻そうとまちづくり協議会が現在取り組んでいる活動資料などを展示した。加えて、来場者の展示に関する記憶や情報を書き込んだ付箋の貼付や、来場者が蘇った記憶をホワイトボードに書くことで日々成長する Museum とした。



【歴史班のチラシ】



【古写真・解説文の展示】



【来場者が思い出を書いたホワイトボード】

成果

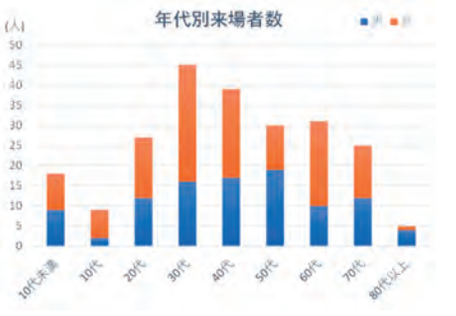
延べ 229 人という多くの方に見てもらうことができた。年代も幅広く、地域以外の方々にも興味をもってもらうことができた。特に地域の方からはたくさんのエピソードを伺うことができ、30 以上のエピソードをしたためた付箋が展示に加えられた。地域の方々で話が盛り上がる場面もあり、MemoryMuseum により三津浜の人々が記憶を蘇らせ、その記憶を未来へと紡ぐことができたのではないかと考える。



【来場者とメンバーの交流風景】



【日にち別来場者数グラフ】



【年代別来場者数グラフ】

ー今後の展望

今回の展示を通して、今失われつつある地域コミュニティの重要性を感じた。地域のコミュニティは、その場が盛り上がるだけではなく、地域の活気に繋がり、新たな人や考えが出会う場になるのではないかと思う。昔、自然と育まれていた地域コミュニティの空間を、新たに作っていくことが地域の活性化に繋がると考える。また、たくさんの方にご来場いただくことができたものの、広報については、もう少し工夫することで、さらに多くの方に来てもらえたのではないかと思う。今回のような展示をするうえで、SNS 等の効果的な使い方も考える必要があると感じた。



【三津浜の町並み】


【三津浜の町並み】

ーご協力いただいた方々

ー展示物の提供にご協力いただいた方々
- 三津浜レトロ（藤岡さん）
- 水口泰司さん
- 末田強さん
- ギャラリー吉川さん

ー空き店舗の提供にご協力いただいた方
- 四宮さん

ーインタビューにご協力いただいた方々
- 男子専科ヤング（丸山さん）
- 三津浜支所（中野支所長）
- 三津浜公民館（門田館長）
- 三津浜まちづくり協議会（瀬村会長、宮内事務局長）
- 魚屋（神浦さん）
- 魚屋の客（重松さん、川田さん）


【歴史班受講生の集合写真】


【歴史班の集合写真】

スクール活動を終えて

柳田 恵利
受講生

多くの人と交流できた活動でした。普段は大学生といった限られた人としか接する機会がありませんが、この企画では社会人と一緒に活動し、三津浜の様々な世代の方と話をすることができました。人々の話から地元の大切さを感じ、地域振興の重要性を再認識しました。貴重な経験を与えていただき、ありがとうございました。

的場 風香
受講生

私にとって三津浜が、懐かしむ思い出の場所になりました。短期間でしたが、地域のコミュニティ空間を作れたことがうれしかったです。普段関わることのない方々の話も聞くことができ、コロナ渦という中で意見を交換し合いながらひとつのものを作る時間はとても貴重だったように感じます。本当にありがとうございました。

山下 日菜子
受講生

学生時代、都市に関する勉強をしていましたが、実地での活動が少なかったのが心残りだったので、実践的な活動ができて良かったです。私達の展示を見て様々な方がまちの思い出を話して下さり、地域の記憶が蘇ったように感じられたのが印象的でした。一緒に議論や作業をしてくださった班の皆様、本当にありがとうございました！

井上 優花
受講生

三津浜について調べる中で多くの知識を得ると共に人と話す機会をいただきました。地域の方々が展示の前で当時の話を楽しそうな顔でお話してくださったことが特に印象に残っています。私達の展示がコミュニケーションの場になって嬉しく思います。また、一緒に話し合い準備をした班の皆さんありがとうございました。

中出 舞
サポート

TA という立場でしたが、スクール生の皆さまと一緒に企画を練り、調査や展示準備をしたこと、展示を見にきてくださる方々が懐かしそうに、嬉しそうにお話する姿を見たこと、どの場面もとても心に残っています。スクールを通して、松山に関わる色々な方々と出会い、貴重な経験をさせていただきました。本当にありがとうございました。

渡邉 浩司
サポート

学生と社会人という垣根を超え、みなさんが活発に議論され、一つ一つ丁寧に創りあげた MemoryMuseum であったがゆえ、来場された方々の心に響き、自ずと過去をしのぶ姿に出会えたのだと思います。三津浜の記憶を未来へ紡ぐことを実現された経験を礎に、今後それぞれの分野で活躍されることを願っています。ありがとうございました。

02 地域デザイン班

受講生　武田芽生子（愛媛大学 3 年）
谷歩実（愛媛大学 3 年）
西澤岳冬（愛媛大学 1 年）
清水凜（愛媛大学 1 年）
円福寺咲紀（松山大学 3 年）
今本光（松山市役所）
瀧宮桃子（東京海上日動火災保険株式会社）
山本千絵（まつやま NPO サポートセンター）
サポート　竹内仁美（UDCM ディレクター）



ー企画名

まつやま銘店大解剖

ー実施日時

10 月 14 日 (金) ～ 23 日（日）
10 時～ 17 時

ー実施場所

松山アーバンデザインセンター もぶるラウンジ

ー参加者数

110 人

ー効果検証方法

・もぶるラウンジへの来場者数
・来場者へのヒアリング
・おすすめスポットの記入数
・パンフレットの持ち帰り数

企画内容

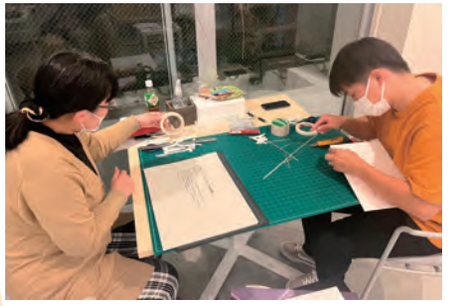
地元の方にお伺いした松山にあるおすすめのお店やスポットを、エピソードと一緒に紹介することで、人の温かさなどの松山の魅力を参加者に感じてもらいたい。

ー企画の目的

「地元の人に松山の魅力を再発見してもらい、観光客には松山へもう 1 度訪れたいと思ってもらうこと」、「この企画を通して心を温かくしてもらうこと」を目的とし、企画名を「まつやま銘店大解剖」とした。また企画名『まつやま銘店大解剖』は、「松山の銘店（アンケートで集まった場所の中から、自分たちが知ってもらいたいと思う良いお店）を多角的に分析して紹介する＝解剖」と考え決定した。



【展示の様子】



【作業風景】



【来場者の様子】

ーこの企画が決まるまで

松山と言えば、鯛めしや松山城、道後温泉などが有名だが、それ以外にも魅力はたくさんある。しかし観光客にあまり知られていないのが残念だという話から始まった。そこで松山の魅力を改めて考えたときに、よく他県の人から「松山の人は温かい」と言われることを思い出した。そして私たちにとっての地域デザインとは何かを考えたときに「松山の温かさ」と考え、温かさを感じさせるものとして、人だけでなく個人的な思い出や歴史に注目した。そこでまず、松山市に住む様々な年代の人に「おすすめの場所（風景やお店）とそこに関するエピソード」を聞いた。また、老舗でかつ展示会場から近いお店としてアミティエと AMOUR へインタビューに伺うことにした。また質問内容は、全体での集まりでいただいた意見などから、お店の紹介よりは店主の人生や松山に関するものとし、多角的に伝えたいということから 3 つの企画を行うことにした。

ー活動内容 01 動画の放映（担当：瀧宮、山本）



【インタビュー動画の放映】

動画は、松山アーバンデザインセンターもぶるラウンジで放映し、動画の内容は、2 つのお店へインタビューをした際のものである。まずこのインタビューまではメンバー全員で動き、インタビュー後、上記 3 つの企画ごとに分かれ各自制作を行った。またインタビューで必ず聞いた内容は、「店主のこだわり」「松山とのつながり（例えば、愛媛県産の食材を使用しているや、松山出身など）」「店主の方の人生・歴史」とした。撮影はＧｏＰ ro2 台を使ったり、顔が暗くならない席を選んだり工夫して行った。AMOUR へは清水、西澤、谷、山本で、アミティエへは清水、武田、山本で伺った。その後、動画編集班は、文字起こしや文字入れ、音楽をつけるなどの動画の編集を 1 人 1 店舗担当して行った。



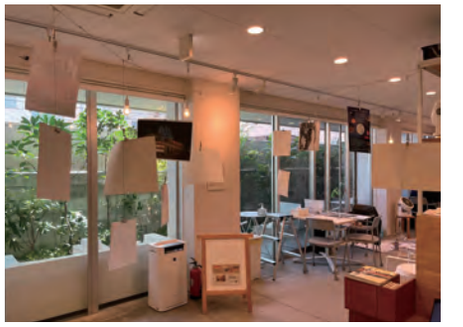
【アミティエでのインタビューの様子】

ー活動内容 02 展示（担当：今本、谷）

展示も、松山アーバンデザインセンターもぶるラウンジで行い、3 つの展示物を制作した。

1 . パネル展示

メンバーの周囲の人に教えていただいたオススメのお店または風景と、その場所に関するエピソードのパネル展示である。A3 と A4 のパネルの裏に 1 つまたは 2 つのエピソードと、表にはそのエピソードを表す写真を貼ったもので、全部で 11 枚作成し 15 ヵ所を紹介した。ここで使われている写真は、裏のエピソードを読んだときにその場面を想像しやすいよう、そのエピソードに関する風景やお店をメンバーが撮りに行った。また天井からひもで吊り下げ、それぞれのパネルの高さを変えることで立体感を出し、動的にすることで見ていて飽きない工夫を凝らした。



【パネル展示】

2 .「大解剖新聞」の展示

これは、インタビュー動画の内容を短時間で視覚的に把握できることを目的として、作成を行った。各店舗の魅力や大切にしている考え方、街の人からの印象などを見出しに記載することで、読者に興味を持ってもらう工夫を行った。

3 .「まつやま銘店マップ」の展示

パンフレット班が作成した、大街道と松山市駅をメインとした地図をパネルにして展示し、会場で用意してあるカードに来場者のおすすめのお店・風景と個人的エピソードを書いていただいた。すでに完成している展示会よりも、参加者と完成させるものにしたいという思いから作成した。



【まつやま銘店マップ】

ー活動内容 03 パンフレットの作成　（担当：清水、西澤、武田、円福寺）

地図がメインのパンフレットをいくつか調べ、以下のような折り方に決定した。（2枚目のように折ると、表面と裏面が重なる折り方）個人のエピソードを見て興味を持った人が行きやすいように、持ち運びやすい大きさや地図を載せるようにし、裏と表を２人ずつに分かれ制作した。



【持ち運びやすい大きさのパンフレット】

パンフレットの表と裏表紙

表面は、大街道と松山市駅を中心とした地図に、メンバーの周囲の人から聞いたおすすめの場所とそこに関するエピソードを載せた。この地図はイラストレーターで１から作成した裏面は、インタビュー記事をメインとしたもので、載せる内容は２店舗で統一し、特にこだわった部分はお店の扉の絵だ。これは飲食店で開くもの（パンフレットを開くにかけて）と言えばお店の扉で、そこを開くとお店についてより知れる記事が読めるようになっている。 また、文字の大きさ、見やすい色合いや、画像を多く使うことで「見やすさ・読みやすさ・デザイン性」全てを大切にした。



【パンフレットの折り方】


【パンフレットの表面】



【パンフレットの裏面】

ー成果

展示期間中、計 110 名の方にご来場いただき、パンフレットは 60 部持ち帰っていただいた。展示を天井から吊るすことで立体感を出し、ラウンジに入ってすぐ来場者の目に留まりやすくすることができた。映像やその他の展示はじっくり見てくださる方が多くいらっしゃり、来場者と作り上げていく「まつやま銘店マップ」も、多くの方に記入していただいた。またこれらの展示を通し、来場者と会話する中で、「このお店知ってる！」「この場所にこんなエピソードがあったんだ〜」「こういうお店あったの知らなかった」などという意見をもらうことができた。お店や風景と合わせて、ガイドブックには載っていない個人的エピソードを伝えることで、来場者にとっても、自身の思い出を振り返ったり、新たな発見のきっかけになったなら幸いである。これらのことから、「地元の人に松山の魅力を再発見してもらう」「この企画を通して心を温かくしてもらう」という目的は達成できたと考える。



【地域デザイン班のチラシ】

３つの企画を通して伝えたいこと

動画の放映

お店でインタビューした内容を、文字だけではなく映像・音声でも伝えることで、店主の人柄、お店の雰囲気を伝え、人の温かさを感じてもらう。

展　示

その場所に初めて行く人にはその場所を知ってもらい、常連客には新しい見方を提案する。

パンフレットの配布

持ち歩ける地図付きのパンフレットを作成することで、動画や展示を見てその場所に興味を持った方に、実際に足を運んでもらえるようにする。

ー今後の展望

目的の１つであった「観光客の方に松山へもう１度訪れたいと思ってもらうこと」を達成するためには、現地での展示だけではなく、SNS や YouTube で発信することも必要であると考える。そして今回「まつやま銘店マップ」に記入していただき新たに集まったお店やエピソードも、SNS や YouTube で発信することで、観光客はもちろん、地元の人にも伝えていきたい。

また店主へインタビューをしたことで、店主の " 人生 " に注目した展示も面白そうだと感じた。店主の人生を通してお店を見ることで、常連客の方は新たな見方ができたり、そのお店に行ったことのない方にも興味をもってもらい足を運ぶきっかけになるからだ。

最後に、今回私たちが行った企画のメインである、松山市に住む様々な年代の人に聞いた「おすすめの場所とそこに関するエピソード」の紹介。これはまた第２弾、３弾と続けていくことのできる企画である。なぜなら日が経つに連れてお店の数と個人的エピソード（＝思い出）は増えていくからである。今後も自分たちの銘店を見つけ、「松山の温かさ」を多くの人に伝えていきたい。

ーご協力いただいた方々

ー取材に応じていただいたお店
　アミティエ /AMOUR
ー掲載させていただいたお店
　万寿 / 味噌とんこつラーメン丸
　みゅんへん / BAR JuJu
ーその他
　エピソードを寄せていただいた方々
　エピソードに関するお店の方々



【パンフレットを手に取るセンター長】



【アミティエさんでの取材班集合写真】



【AMOUR さんでの取材班集合写真】

スクール活動を終えて

武田 芽生子
受講生

今回の活動は、私にとって初めての経験の連続でした。学生だけでなく社会人の方々と限られた時間の中で話し合いを何回も繰り返し、形にすることはとても大変でした。しかし、こういった経験があったからこそ完成した時の喜びもまた大きく、私の財産になりました。短い間でしたが濃い時間をありがとうございました。

谷 歩実
受講生

学生と社会人で様々な意見を共有することで、考え方や視点の広さなどを学ぶことができました。また、忙しい中無事に展示物を完成させることができ、メンバーには感謝しかないです。今回の活動を通して、自身の計画力のなさを感じたので計画力の向上を今後の課題としたいです。短い期間でしたが大変貴重な経験となりました。本当にありがとうございました。

清水 凜
受講生

松山で暮らし始めて半年という中、様々な立場の方と共に松山のまちづくりについて考えることができ、私にとって非常に学び多い有意義な時間となりました。松山に暮らす人々の想いを形にして伝えることで、松山の新たな一面を発見し、私自身の視野が大きく変わりました。短い間でしたが、貴重な経験をありがとうございました。

西澤 岳冬
受講生

私は大学から松山に来ておりこの町について良く知らなかったのですが、スクールを通して人の温かさ、松山の住みやすさを学びこの町が好きになったスクールでした。普段の大学とは違い、年上の方が大半で社会人の方も交えた環境に身を置くことで多くの学びを得ることが出来ました。短い時間でしたがありがとうございました。

円福寺 咲紀
受講生

このプログラムを通して計画の大切さ、企画の目的を達成する方法の多さ（展示をするにしても展示方法、展示場所や内容で展示の種類は無限大にあることに気づいたため）などたくさんのことを学ぶことができたため、参加できて本当によかったです。また短い間ではありましたが、みなさんありがとうございました。

今本 光
受講生

学生と社会人が協力してイベント内容を練り上げていく活動は、自分の人生においてとても素敵な経験だったと思います。普段は決まったコミュニティの中でしか人と出会いませんが、このスクールでは様々な方との出会いがあることで、異なる視点・考え方を共有することができました。スクールで出会った方とは、今後も繋がっていけるとうれしく思います。

瀧宮 桃子
受講生

スクールの受講生応募チラシをみて参加しました。元々生まれ育った地元への貢献や活性化、街の形成に関心があり、就職を機に松山に戻ってきました。このスクールでは仕事から離れ、多方面からのレクチャーで地元を見つめ直したり、普段関わることのない先生方やスクール生と意見交換して最終的には制作・展示をしたりととても刺激的な時間を過ごすことができました。スクール卒業後も自分なりに松山に向き合っていきたいと思います。今回は貴重な経験をありがとうございました。

山本 千絵
受講生

学生・社会人メンバー全員が限られた時間で、自分たちで企画を作り進めていくことの様々な苦労を体験しながら、なんとか一つの企画を実現させることができました。私自身、実際の展示を見て、とても達成感を感じています。展示を見た方、メンバーにとっても心に残る企画になることを願っています。ありがとうございました。

竹内 仁美
サポート

「松山の地域資源＝人の温かさ」と定義はしたものの、形のないものをどうやって伝えるか、メンバーで何度も話し合いを重ねてどうにか形にすることができました。短い期間ではありましたが、皆さんと一緒に松山の魅力について改めて考え、悩みながら作り上げていくことができ、良い経験になりました。ありがとうございました。

03 モビリティ班

受講生　田村有衣莉（愛媛大学 1 年）
平田瑶（松山大学 2 年）
冨永淳平（東京海上日動火災保険株式会社）
田中一浩（広島県庁）
小川大智（東京大学大学院 1 年）
岡田直大（松山市役所）

サポート　三谷卓摩（UDCM ディレクター）
松尾悠馬（UDCM 学生スタッフ）

一企画名

未来の中ノ川　水辺の癒し体験

一実施日時

10 月 16 日 (日)、22 日（土）、23 日（日）
10 時〜 15 時

一実施場所

松山市総合コミュニティセンターこども館屋外

一参加者数

211 人

一効果検証方法

参加者数の計測
参加者アンケートによる把握

企画内容

江戸時代に水上輸送に用いられていた「中ノ川」を対象に、今は見過ごされている水辺の癒し空間を演出します。親子で花や風船などを用いて、イメージする未来の水辺をつくりながらゆっくりと流れる時間を過ごしましょう。

一企画の目的

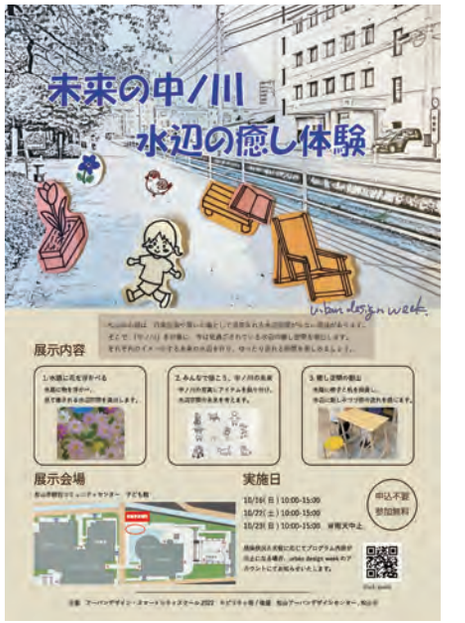
江戸後期、松山城下と三津浜間を連絡する「中ノ川」は、造り酒屋の物資や緑米などの搬に活用され、その荷物の積み下ろし場所であった現在の湊町３・４丁目付近は、商業が集積し大いに発展したとされる。その後戦後において、湊町３・４丁目付近は松山有数の飲み屋街として発展するなど、川は地域をつなぎ、人々の暮らし・交流・商業の発展に大きな機能を果たしてきた。

しかしながら、現在の「中ノ川」は、市民からさほど関心をもたれず、日常生活において親水空間としても親しめる状況とはなっていない。

そこで、モビリティ班では「中ノ川」にもっと関心を持って頂き、将来的に魅力的な水辺空間としていくため、水運の歴史に焦点を当てるとともに、水辺を体験しながら利活用の将来像を描くことで、水辺の再生に向けた足がかりをつくることとした。



【水辺体験をしている様子】



【モビリティ班のチラシ】

一企画の実施箇所

現在の中ノ川は、暗渠化し、さらに開渠であっても水流が十分でない区間が多く、川縁を車両が走行する区間が大半なため、水辺の体験箇所としてはあまり適していない。そこで、中ノ川と隣接した松山市総合コミュニティセンターに広場や水路があること、さらに、車両運行実験の停留所でもあることから、当該箇所での水辺体験のイベントを実施することとした

実施内容 01 歴史紹介

NHK ブラタモリでも紹介された中ノ川であったが、歴史資料が乏しく、水運の状況など詳しいことはわからない状況にあった（愛媛県歴史文化博物館）。その中でも、愛媛県まなび推進課から「松山市史第２巻近世」（平成５年４月１日発行）における湊町町名の由来の記述の提供を受けた。さらに、松山銀天街商店街振興組合による松山市湊町４丁目町史を入手し、配布用の歴史チラシを作成した。



【中ノ川の歴史紹介】

実施内容 02 水辺の癒し体験

水路での癒し空間を創造する方法として、寺や神社における花手水を参考にした。花手水は水の流れは起こさず、花やみかんなどを浮かべて水面を色鮮やかに彩った。参加する子供たちには、花や水に実際に触れることで、五感を使いながら楽しんでもらうことにした。



【水路に浮かべた花】

実施内容 03 未来の中ノ川・お絵描き体験

犬や猫，花壇，椅子や机，自動運転車両などのアイテムをこちらで用意した。参加者には、アイテムを貼ったり、書き加えたりすることで、自分なりの未来の中ノ川を作成してもらうことにした．作成した絵は、ロープワークを使って組み立てた三脚とそれを繋ぐロープにクリップを使用して掲示した。掲示したいろんな人の絵をみることで未来の中ノ川のイメージを共有することにした。



【用意したアイテム】

実施成果

１．歴史紹介

歴史チラシ用に大きなパネルを作成したことで、図書館やコミュニティセンター帰りの様々な人に立ち寄ってもらうことができ、中ノ川に対する想いについて伺うことができた。年配の方からは、湊町の戦後の賑わい、さらには下流側でたくさんの魚が取れたこと、コンクリート張りではない自然な川への想い入れを語ってもうらうことができた。一方、家族連れや若い方からは、散策できる水辺空間になってほしいとの話を聞くことができた。今回のイベント実施箇所には、ベンチが数基設置されており、昼休憩時にサンドウィッチを食べている方やのんびり休憩されている方がおられた。



【パネル設置の様子】

イベントの実施により、さらに楽しんでもらう時間や機会を提供できたのではないかと思った。建物間や川縁が市道で分断されている施設内のレイアウトは、工夫によってはもっと魅力的な空間にできるのではないかと感じた。

ー実施成果

2．水辺の癒し体験

水がきれいであったため、底に沈めた花びらを見ることができ、流れる川と水辺でゆっくり過ごす時間を想像することができたのではないだろうか。



【イベントに参加している参加者の様子】

ー実施成果

3．未来の中ノ川・お絵描き体験

子どもたちは事前に考えていた作成例とは大きく違う、それぞれの個性が溢れた絵を描いていた。川の中にベンチを置いて本を読めるようにするといった子供たちの発想力に驚かせられた。最初は恥ずかしがってあまり話してくれなかった子も、絵を描いたりアイテムを貼り付けたりしていくことを通して心を開いてくれるようになった。プログラムに参加した子どもの親御さんに話を伺うと、家でも絵を描いたり工作が好きで、このように外で遊ぶことが出来るのはとても良い、もっと増えてほしいと話してもらえた。このようなイベントを増やすことで、大人も子どもも楽しみながら学べるようになるのではないだろうか。



【お絵描き体験で作成した絵】



【参加者とメンバーが交流する様子】

ー今後の展望

水辺を体験しながら利活用の将来像を描くことにより、水辺整備の機運を高める可能性があることを示すことができた．当該箇所の西側では JR 松山駅付近連続立体交差事業が実施されていたり、松山市総合コミュニティセンターのコスモシアターでは老朽化がみられたりすることから、これらの事業の進捗や水運の歴史も踏まえた魅力的な水辺空間の整備につなげることが望まれる。今回、シミュレーションを用いた将来予測まで実施することができなかったので、それは今後の課題としたい。



【メンバーが作成した絵】

ーご協力いただいた方々

ープログラム実施場所の提供
松山市 総合コミュニティセンター こども館：
小川様
ー現地プログラム実施時のサポート
昨年度スクール生：
細川直央人様
松山市 都市・交通計画課：
仲岡光生様，野本崇兼様，
上田朱里様
ー江戸期の水上交通
愛媛県 歴史文化博物館 学芸課：
山内治朋様
ー松山市史に関する情報、転載の可否
松山市 教育委員会事務局 文化財課 文化財保護担当：
本田静香様
愛媛県 観光スポーツ文化部 文化局 まなび推進課研究科（愛媛県生涯学習センター駐在）：
ご担当者様
ー松山市湊町４丁目町史
松山銀天街商店街振興組合：
キクザワ様

資料・データ

1．UDweek. 参加者アンケート（総数：17）
※当該プログラム参加者対象

■満足度の理由　※複数回答あり
・子供が楽しく参加していた．（9）
・中の川の歴史について知れてよかった．（2）
・水路に物を浮かべる展示が綺麗だった．（2）
・水辺というあまり触れる事のない場所で遊ぶ事ができてよかった．（2）
・子供のお絵かきがよかった。
・塗り絵の題材がこどもには少し難しかった．
・親子の憩いの場を今後も増やしてもらいたい．
・子どもに人との繋がりを感じさせる事が出来た。
・未来のある子ども達が、「まち」に触れ、「まち」を感じ、人との繋がりや「まち」を考える、この様な企画をまた開催して欲しい。

■参加したきっかけ
・コミセンに立ち寄り，通りすがり（6）
・UDCM のウェブサイト（5）
・松山歩いて暮らせるまちづくり行動実態調査，楽天（3）
・知人からの紹介（2）
・UDCM からの招待（1）

2．参加者の計測

10/16
　15 グループ，40 名（大人 25 名，子供 15 名）
10/22
　35 グループ，96 名（大人 48 名，子供 48 名）
10/23
　30 グループ，75 名（大人 33 名，子供 42 名）



【モビリティ班と 10/16 サポートメンバーの集合写真】

スクール活動を終えて

田村 有衣莉
受講生

グループでの話し合いや協力もあり、自分の企画が実際に実現できたことに喜びを感じました。実施することでしか分からない準備の大変さや予算の問題なども学ぶことができて良かったです。また当日は、子ども達がお絵描きを通して楽しみながら中ノ川の未来を考えており将来の中ノ川が楽しみになるような活動が出来ました。

平田 瑶
受講生

当日はたくさんの親子連れや通行人が訪れ、楽しそうに水路を指さして話している姿が印象的でした。私達だけでなく、参加してくださる方々に興味を持ってもらえる企画を考え、実現可能なものに仕上げることにはかなり苦戦しましたが、グループメンバーの様々な視点が一つのものを作り上げる大きな力になったと感じています。

田中 一浩
受講生

メンバーの皆様とつくりあげたイベントは本当に楽しかったです。水辺のそよ風の心地良い空間で、調べた歴史を説明し、見ず知らずの方から戦後の中ノ川周辺のお話を聞くというのは、何とも贅沢で楽しい時間の過ごし方でした。今後もこのようなコミュニケーション空間づくりを行っていきたいと感じました。

岡田 直大
受講生

「水運」として使われなくなった中ノ川・水辺空間の少ない松山市という視点から、中ノ川の将来像を描くプログラムをこどもたちに体験してもらうことに至り、プログラム当日は、たくさんのお子さん連れの家族等が参加し、会場が笑顔に溢れていました。スタッフ側においても楽しくプログラム活動を実施できたことが嬉しく思います。

松尾 悠馬
サポート

私たちのグループは、「自分がしたいこと」を考え、そこからイベントの構想を練りました。準備期間は短く感じましたが、より未来を見据えた活動になったので良かったです。歴史と未来の両方を楽しみながら同時に考える機会となり、イベント時のさまざまな触れ合い体験を通して、時の流れを鮮明に感じることができました。

三谷 卓摩
サポート

メンバーたちの個性ややりたいことが結び付き，短い時間で一つのプログラムとしてまとまる状況を生み出せたのは，自分の新しい感覚を養うことができたように思う．さらに，プログラム自体を多くの人たち（特に家族連れ）に楽しんでもらうことができ，まちの時間の過ごし方や歴史や未来について伝え，共有できる体験ができてよかった．

レクチャー講師メッセージ

9/3 講師
青柳 菜摘
美術作家

三津浜、中ノ川、食文化、それぞれ松山の中にいる受講生のみなさんだからこそ見つけた視点で実践されている「知り直す」活動だったように思います。とくに、複数人で取り組むことで、インタビュー撮影で声を集める、年表をつくる、パンフレットとして情報をまとめるなど、テーマに対してさまざまな形態で応えることは、振り返ったときに「調査したこと」への視点に限らず、「その時代の発表のかたち」が残るものになったのではないでしょうか。コロナ禍を長く過ごしたからこそ、再び集まって知り直すことができたのだなと、松山を周りながら考えていました。

9/3 講師
川口 真沙美
公益財団法人
日本デザイン振興会

まずは無事企画の実現と遂行、おめでとうございます。多くの方が参加されている様子を報告書で拝見し、人との出会いや交流から未来が作られていく事を改めて感じました。各班で取り組まれたことは、統合されている町というオブジェクトのロックを解除しパスを認識できるようにするような役割で、受講生・参加者それぞれの立場や関心事ごとに、そのパスを繋いでこんな町を描いてみたいという次の行動につながっていくのではないかと思います。活動で感じた気づきや感情といった感覚を今後も大事にしていただきたいなと思いました。

9/3 講師
増橋 佳菜
東京大学大学院
修士１年

キックオフ時期に歴史班の TA のような立ち位置でお手伝いさせて頂きました。来場者が自身の記憶を辿ってともに作り上げていく記憶のアーカイブ展示は、ともすると忘れ去られそうな地域の軌跡を、風化させず伝えていくきっかけを作った意義ある活動であったと思います。来場者の方々の年齢層も幅広く、現地に足を運び、地元の方々の声を熱心に集められたことの成果と思いました。東京から活動を垣間見ながら、大変勉強になりました。

9/8 講師
大村 珠太郎
清水建設

特に印象に残ったのは地域デザイン班の『まつやま銘店大解剖』である。何度か来ている松山であるが、新しいお店を知るきっかけがいままでなかった。パンフレットも温かみのあるものとなっており、記載があるお店に行きたくなるものとなっていた。是非第 2 弾、第 3 弾の解剖をしていただけると地域全体の発展につながると感じる。

9/3 講師
伊藤 香織
東京理科大学 教授 /
UDCM プロジェクト
ディレクター

「地域デザイン班」は、地域の人々の体験と言葉を通して地域を紹介する取り組みとなっている点や複数の形式で伝える工夫が優れていると感じました。「歴史班」の展示は非常に充実していたので、これを機に是非常設を目指してもらいたいです。歴史を展示し形成過程が今のまちにどう繋がっているのかを伝える拠点が他の多くのまちにはあります。「モビリティ班」の活動は生憎見ることができなかったのですが、水辺空間を使うアイディアを実現し参加してもらえたことは良い経験になったことと思います。

9/3 講師
中野 靖子
伊丹十三記念館
学芸員

まちの魅力をまちの人たちに伝える、なかなかに難しいことですよね。それが見事に達成された各展示に心の中で拍手喝采です。 身近な物事に「おや？」と感じ、観察し思考し学習し議論することは、仕事にも生活全般にも閃きをもたらしてくれます。それを忘れていたぞ…頑張らねば…と我が身を省みる、貴重な機会をいただきました。 今後、皆様それぞれどこでどのように生きていくことになっても、よき生活者・職業人・市民としてご活躍くださることでしょう。お疲れ様でした！

9/3 講師
平岡 瑛二
子規記念博物館
学芸員

歴史班の「Memory Museum ～未来へ紡ぐ三津浜の記憶～」については、観覧者とともに作り上げる展示の試みとして興味深く拝見しました。地域の方々のコミュニケーションの場、記憶をたどり、未来を描く場としての歴史展示の役割に光が当てられており、博物館の現場にとっても参考になる企画かと思います。　地域デザイン班の「まつやま銘店大解剖」については、単なる商店のガイドブックではなく、そこに地域の人の記憶や歴史を加えることで深みを持たせていることに興味をひかれました。　モビリティ班の「未来の中ノ川、水辺の癒し体験」については、市民に中ノ川の存在や歴史的背景を周知し、今後の水辺の未来像について考えてもらうよいきっかけになる企画ではないかと思います。

「アーバンデザイン・スマートシティスクール松山」の取り組みが令和４年度 都市景観大賞（景観まちづくり活動・教育部門）にて「優秀賞」を受賞しました。

都市景観大賞
景観まちづくり活動・教育部門 とは

地域に関わる人々が景観に関心をもち、自らの課題として捉え、その解決に向けて活動できるよう意識啓発、知識の普及、景観制度を活用した取組等による活動を対象にした、都市景観大賞の１部門です（全２部門）。国土交通大臣賞である「大賞」のほか、「都市景観の日」実行委員会会長賞として、「特別賞」及び「優秀賞」があります。



表彰楯

審査員講評 | 福井恒明（法政大学 教授）

松山アーバンデザインセンターの活動は、花園町通り改修や地域の景観資源を使いこなす多くの成果を生み出してきた。これらは公民学の連携を重ね、地域の仕組みとして定着させてきたことの賜物である。こうした活動を長期間維持する際には、担い手の入れ替わりによる停滞の回避や、活動が途切れないようなプログラム企画がポイントになる。本活動ではディレクターを若手研究者や市派遣者が担い、高校生から大学院生の幅広い年代の若者が参加することによって、継続的な担い手確保と理解者支援者の拡大が実現している。それに加えて交通分析の可視化や最先端技術の導入など、他地域では一般的でない分野の研究者・技術者の参画により、まちづくりのイメージを変える戦略的な取り組みが行われている。松山では今後も重要な公共空間の整備が続く。アーバンデザイン・スマートシティスクールの活動が奏功し、市の骨格が豊かな空間として実現し、それを使いこなす市民の活動が継続していくことを期待する。

urban design week. とは

アーバンデザイン・スマートシティスクール松山の活動プラン実施（企画の実践）と松山スマートシティプロジェクトのフィールド実証実験が連動した都市回遊型社会実験。2022 年 1 月の初開催を目指していましたが、開催直前に愛媛県内の COVID-19 新規感染者数が急増したことを鑑み、2022 年度に開催を延期していました。

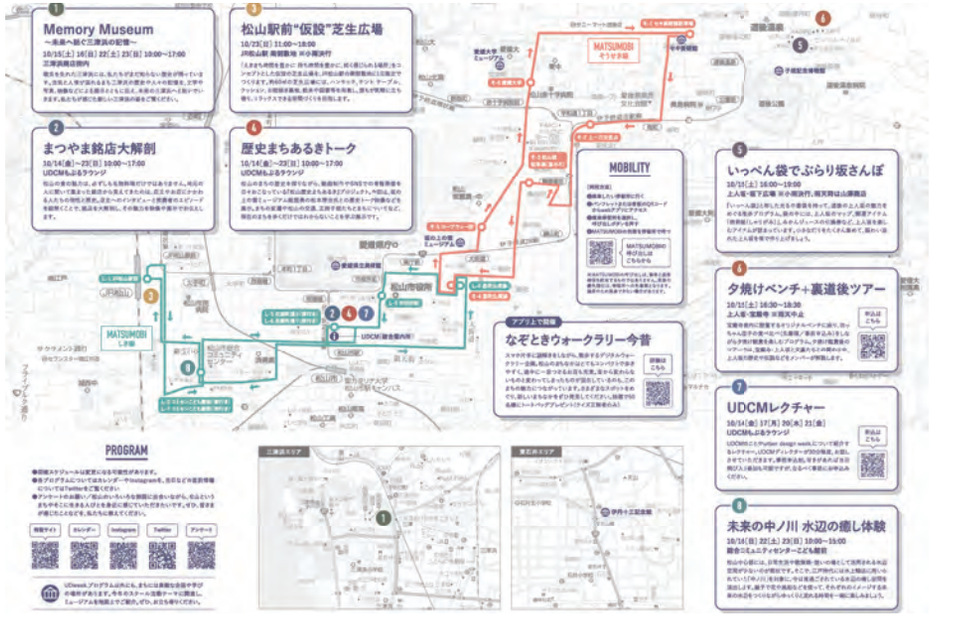


2022 年 10 月開催テーマ画像

2022 年 10 月開催について（14 日～ 23 日）

2022 年度スクール受講生による展示や、2021 年度スクール受講生の有志等によるプログラムの実施、市内各地をつなぐ次世代モビリティ（MATSUMOBI）の実験的走行等、都市の魅力と課題を体感する企画を実施。延べ約 970 名の方に参加いただきました。

Instagram のハイライトにて
開催当日の様子をご覧いただけます



urban design week. マップ

活動風景






明治 21(1888)
明治 18(1885)
三津浜煉瓦会社 創立
明治 16(1883)
正岡子規、三津浜より初上京
明治 20(1887)
















Lee

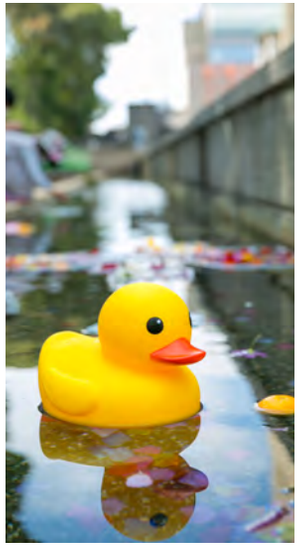







歴史まちあるき





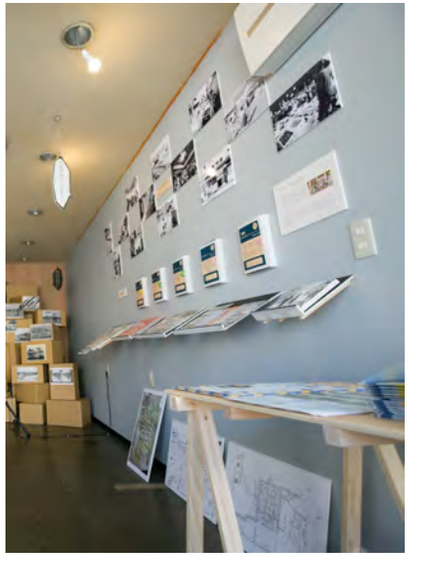










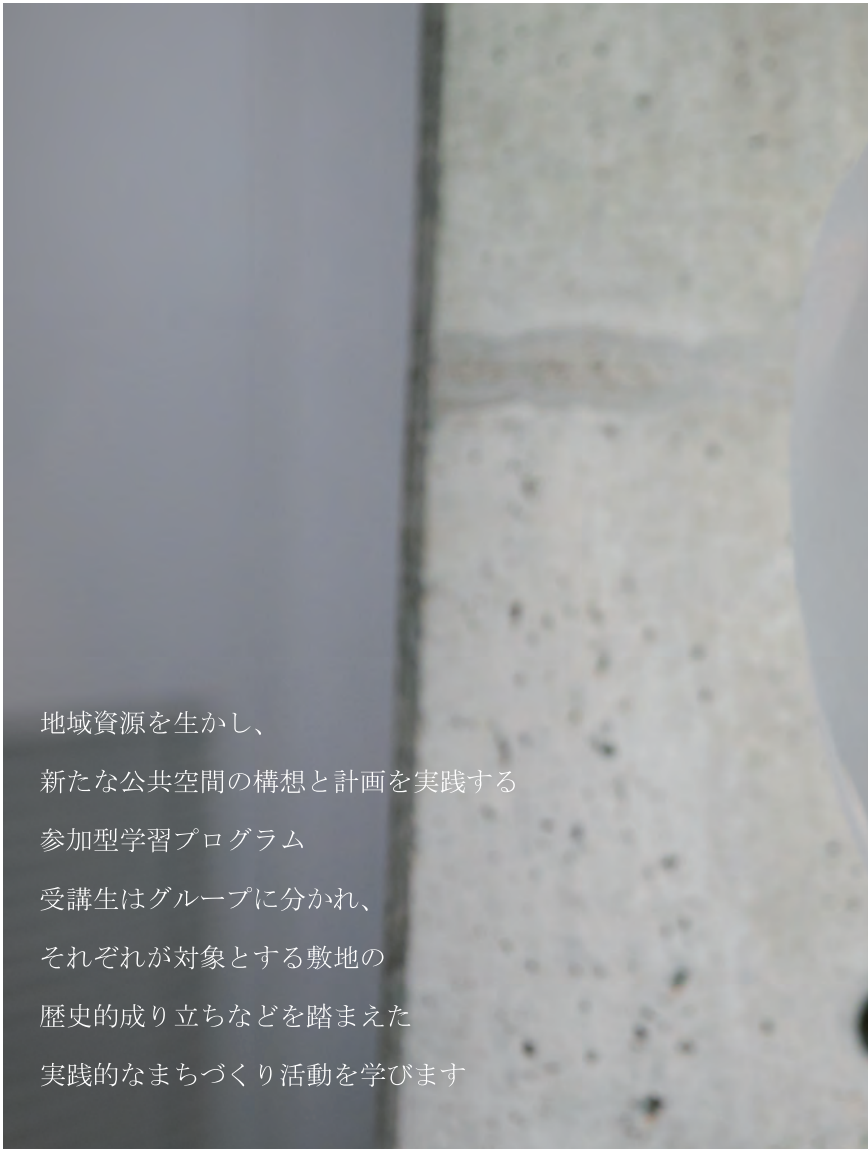


アーバンデザイン・スマートシティスクール松山
プロジェクトレポート　2022.8-2022.11

2022 年 12 月発行

企画　板東 ゆかり（UDCM ディレクター）
編集　谷　歩実　（UDCM 学生スタッフ / 愛媛大学 3 年）

発行　松山アーバンデザインセンター（UDCM）
｜住所｜愛媛県松山市花園町 4-9 岡田ビル 1 階
｜ HP ｜ https://udcm.jp



地域資源を生かし、
新たな公共空間の構想と計画を実践する
参加型学習プログラム
受講生はグループに分かれ、
それぞれが対象とする敷地の
歴史的成り立ちなどを踏まえた
実践的なまちづくり活動を学びます